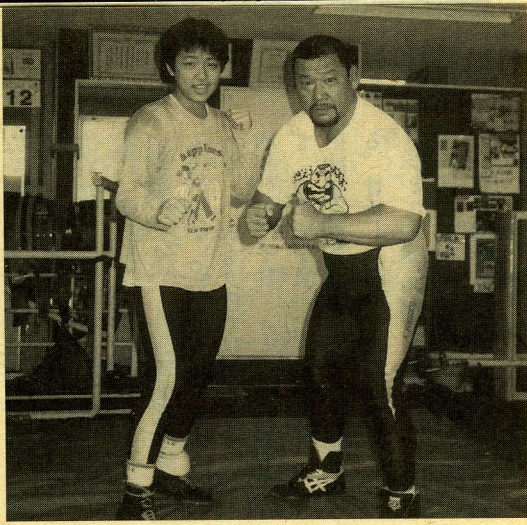


レスリング選手・浜口京子さん
プロレスラー・アニマル浜口さん父娘

昨年五月、女子レスリング界にさっそうと新星が現れました。プロレスラー・アニマル浜口さんの長女、浜口京子さん(16)です。

●^{はまぐち}浜口京子さん

1978年1月11日、東京都台東区生まれ。13歳でボディービルを始め、わずか3カ月でボディービルミス東京大会に出場、最年少記録を作る。このとき奨励賞を受賞。その後、レスリングを始め5カ月で挑戦した昨年5月の全日本女子選手権で4位(61キロ級)。11月の全日本女子オープントーナメントでは見事に2位となった。その他、空手も習っている。167cm、63kg。

●^{はまぐち}アニマル浜口さん

1947年8月31日、島根県浜田市生まれ。プロレスラー。本名は浜口平吾。87年、浅草に「レスリング道場兼人生塾」のトレーニングジムを開く。首の故障のため一時は引退したが、「生涯、レスラーでいたい」とカムバック。現在は講演活動もこなす。175cm、100kg。

柔道、サッカー、アイスホッケーといままで男子だけのものと思われていた競技にどんな女子が進出していきます。レスリングもその一つ。今回は女子レスリング界の新星、浜口京子さんと父親・アニマル浜口さんに、「アニマル浜口トレーニングジム」でお話を伺いました。

〆アニマル京子誕生

「ボディービル、レスリング、空手と三つも競技をされているようですが、スケジュールはどうなっていますか。」

「月曜から土曜の夜六時半〜八時半までレスリング。火・木・土の午前中は空手。水・金の十時半〜十二時半、そして日曜・祝日の夕方五時から八時まではこちらでトレーニング。月曜は趣味で料理も習っています。」

「いま高校一年生、学校のほうは。「三カ月通いましたけど、いまは休学しています。練習との両立は難しくても高校は出ておきたいので、通信制の勉強を始めるつもりです。」

「まさにスポーツ漬けですが、京子さんにとってスポーツとは何でしょう。「空気や水のように、あつて当たり前前

そしてなくてはならないものです。」

「忙しい毎日の中の楽しみといえば。「音楽を聴くことかな。マイケル・ジャクソンやマライヤ・キャリーが好き。」

「京子さんは十三歳でこのジムに来るようになって、わずか三カ月後にボディービルの大会に挑戦したとか。その間、何度も泣かれたそうですね。」

「トレーニングを始めて一カ月で父が『ボディービルミス東京大会』に申し込んだ。でも大会という目標がなかったら続けられなかったと思います。」

「この件について父親の浜口さんはこう語っている。「ボディービルは減量のほかに日焼けをしなければならいんですが、京子はアレルギー体質で湿疹ができるのでそれが大変だった。でもあんなときは娘を信じて出しました。」

「二位になった昨年十一月のレスリングの大会の前に、お父さんに「試合を見にこないで」といわれたそうですが、お父さんともまとったようですが、あれはどういう意味だったのですか。」

「私のわがままだと思われるかもしれませんが、他の選手は親なんかついてこないんです。だから私も甘えずに、他の人と同じように一人でやってみてみたかったです。」

「一人でやれる自信がついたから、ということですね。京子さんは練習中にはよく涙をこぼされるとか。そんなにしてまでなぜ続けるのですか。」

「私、すごい泣き虫なんです。ハハハ。できないのが悔しくて泣いちゃう。」

「次の目標は何ですか。」

「五月と十一月にレスリングの大会があるんで、ぜひ勝ちたいです。」

「レスリングと空手とボディービルの三つでチャンピオンになる、そしてそのあとプロレスラーになることです。」

「オリンピックについては。」

「シドニー五輪では種目に入りそうなんです。そのとき私は二十二歳でちょうどいい時期ですから、ぜひ出たいと思います。プロレスを引退したあとは、ここでコーチをしたいと思っています。」

「激しいスポーツばかりで生理の予定日が狂ったりしませんか。また気分が乗らないときはどうしていますか。」

「私は別に生理が狂ったりしたことはありません。気分が乗らないときはたまにありますが、練習に行く前に好きな音楽をガンガン聴いて、自分を乗せようと努力します。それでもだめなときは、父にいつて練習を休みます」

——京子さんにとって、お父さんはどんな存在ですか。

「(ちよつと考えて)自分のことを一番わかってくれている人」

——ではお母さんは。

「友達みたいな存在、何でも話せるんです。あとほうちはおばあちゃんと弟(剛史くん、中二)がいますけど、仲良し家族なんです。よく話すし、よくケンカもする。しょっちゅう大声を出しています(笑)」

——お父さんを採点してください。

「百点満点でいうと、九十点かな。マイナス十点はお酒。飲みすぎたら体が心配だし。でも最近控えているみたいです。マイナスはそれだけ」

アニマル浜口、人生塾と娘を語る

ジムの入口に浜口さん作の、こんな「人生訓」が掲げられていました。

「太陽の道」

勇気を出して未来へ進もう
大自然に抱かれて生きている私たち
踏まれてもつまづいても

前向きに生きよう 自分の道

——ここは「レスリング道場」であると同時に、「人生塾」でもあるというこ

とです。

「八七年に一時プロレスを引退したとき、ボディービルルのミスター東京シニア大会に出るために、三十五キロの減量を自分に課しました。ほとんど食べ物をお口にせず、食べてもご飯をおちよこに一杯ぐらいだけ。栄養が頭にいかずボートとした中から、いろいろな真理・悟りが見えてきたんです。四十過ぎて人生を考え始めたわけですが

たとえば、人間には大切な三つのことがある。まず『感謝の心』。われわれは生かされているということを忘れないこと。空気が、ご先祖さま、そして周りの人たちに私たちは生かされているわけです。次に『負けん気』、発奮することです。そして『謙虚さ』。この三つのバランスが大事なんだ。

練習のときに、選手たちにもよく話して聞かせています」

——息子さんはバレーボールをされているそうですね。息子さんでなくお嬢さんに格闘技を勧めた理由は。

「京子は当時、学校がキライで、自分の目指すもの、自分が燃えることができないものを見つけたことができなかったんです。京子は勉強より運動に向いていると思ったから、このジムに連れてきました。息子に関しては自分からバレーボールを始めた。だから放っておいて好きなようにやらせています。勉強に限らず、子供の何か一つすぐ

れているところを、親は見つけて伸ば

してやればいい。子供が助けを必要としているときに、道しるべを見つけてやる、明かりを灯す、それが親の務めだと思っています。それと、子供には親の愚かさ、バカさを全部見せています。そのうえで偉さも見せるんです」

——京子さんのいちばんすくれたところはどこだと思われませんか。

「荒々しく激しいこと。うん、それよりもこのこだわらないことだな。こだわらなさすぎて、部屋を散らかすのが得意なんだ。練習を一休みしていた京子さんが「余計なこといわないでよ」とちよつと口をとがらせた。でも、だからこそ試合で自分を出せるんだよ」

——京子さんを含めて、レスラー志望の女子選手を指導する際に、何か気をつけていることはありますか。

「やさしく温かく、少しずつ慣れさせていくことを心掛けています。まずは

ケガをしない体を作ることです」

(この日、練習に来ていた鴨下志乃さん(17)と中野知陽呂さん(16)は、「ここに来ると体だけでなく心も鍛えられる」と話していました。)

——最後に、京子さんにかける夢について聞かせてください。

「人生は夢があるから、こそ生きていける。京子にはレスリングと空手とボディービルルの三冠をとって欲しい。二度とない人生、いまを生きる。青春を熱く燃やして欲しいと思っています」

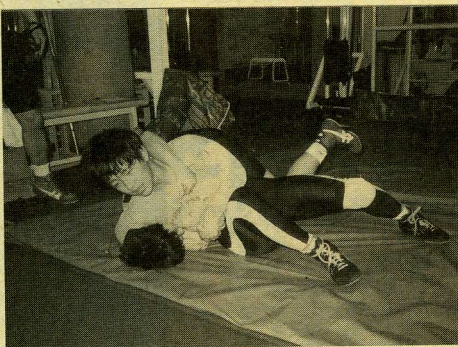
◇

ジムの広さは約四十五坪。ずらっと並ぶトレーニングマシンの間に敷かれた四畳半程のマットの上で、練習に励む若い汗が飛び散っていました。

最初に自己紹介されたとき、「え、この人が？」という印象を受けたほど、

素顔のかわいい京子さんでした。強いお父さんに引つ張られてやっているのでは、という先入観はお話を聞いて吹っ飛びました。京子さん自身が自分をしっかりと持ち、未来を見つめているということがよくわかったのです。私はエネルギー開発人間です」とおっしゃる浜口さんと京子さんから、取材を通してまさにエネルギーをたくさん分けていただいた気がしました。おまけに、浅草名物の人形焼きのお土産までいただいで帰ってきました。

(二月十二日取材・聞き手/WFSJ 山本尚子)



▲練習にはげむ京子さん